

『文学論』から「文芸の哲学的基礎」へ

—ロイド・モーガン『比較心理学』との関わりを中心に(I)

塚 本 利 明*

1. はじめに

「文芸の哲学的基礎」は、明治40年4月20日に漱石が東京美術学校で行なった講演に加筆し、同年5月4日から6月4日まで「東京朝日新聞」に連載したものである。この年の4月に一切の教職を辞した漱石は、連載にあたって「この長編は、講演として速記の体裁を具ふるにも関はず、実は講演者たる余が特に社のために新たに起草したる論文と見て差支なからうと思ふ」とした。この言葉は、少なくとも発表当時、漱石がこの講演に十分な自信をもっていたことを示している。

ところが、この論文を収録した『『社会と自分』自序』（大正元年12月）には、これとはかなりニュアンスの異なった言葉が見える。『『文芸の哲学的基礎』は随分むづかしい大問題をさも容易さうに、従つてある意味から見て、幾分か軽佻に、講じ去つた趣があるので、自分は甚だ遺憾に思つて居る』というのである。漱石は、初めて「朝日新聞社員として、筆を執つて読者に見えん」としたとき、「余の文芸に関する所信の概要を述べて、余の立脚地と抱負とを明らかに」しようとしたのだった。講演の速記を「全部書き改め」て「遂には原稿の約二倍位長いものにして仕舞つた」という事実が、当時の漱石の意気込みを物語っている。しかし数年後に振り返

*専修大学名誉教授

たとき、主題ないし内容の大きさに比べて、それを論じる過程があまりにも安易に過ぎたことに、漱石はある種の後悔を抱いたようである。

「文芸の哲学的基礎」は、疑いもなく「随分むづかしい大問題」を含んでいる。漱石の視野は、旧約聖書から当時最新の心理学にまで及んでいるのである。だが、この「論文」を発表した媒体が新聞だったという制約もあって、漱石は『文学論』におけるように様々な実例を挙げることができず、多くの学者・評論家の説を引いて、それらの「大問題」を論じ尽くすこともできなかった。この論文が現在にいたるまで読者の十分な理解を得られていないのは、こういう事情のためではないか。以下、『文学論』および「文芸の哲学的基礎」に含まれる諸問題のうち、ロイド・モーガンの「意識」理論との関わりを中心に、文芸の「理想」、特に「壮」の「理想」の背景について考察してみたい。

2. 「文芸の哲学的基礎」と『文学論』の間には 「革命的变化」があるか

「文芸の哲学的基礎」は『文学論』と同じく、「意識」の問題から出発する。すなわち、「空間」、「時間」および「因果の法則」があるという「通俗」の考えを斥け、「意識」と「意識すると云ふ働き」とだけが「髓」であり「炳乎として争ふべからざる事実」であるという立場から出発する。他方『文学論』は、「凡そ文学的内容の形式は (F+f) なることを要す」という定義で始まり、「Fは焦点的印象又は観念を意味」とした後、「焦点的なる語」を「説明」するには「溯りて意識なる語より出立せざるべからず」として、「意識」の問題に移るのである。この意味では、両者は同じく「意識」の考察から出発していると言うことができる。ところがかつて島田厚は、『文学論』から「文芸の哲学的基礎」への移行に際しては「革命的变化」があったと主張した¹⁾。この「変化」とは、「スペンサー的決

定論」から「ある程度の自由」を認める立場への「変化」であって、「そのモメント」は「ジェームズの提出した独創的な意見との接触にあった」と言う。鳥田説への反応は、ある種の「保留」を付けた上で「この結論はおそらく正しい」とするものから²⁾、「自由意志論の人間観及び文学批評の方法は〔漱石の〕生涯を貫くものである」として、これを全面否定するものまで³⁾、さまざまである。ここでは、これらの批判について立ち入る余裕がないので、先ず鳥田説の当否そのものについて、できるだけ事実面に即しつつ、やや詳しく検討してみよう。

スペンサーの心理学を「決定論」と言い切るのが妥当か否かは暫らく措くとして、鳥田がこのような断定を下す過程を要約すれば、ほぼ次のようである。かつて太田三郎は、「漱石の文学観の根本にはスペンサー流の社会と個人との意識・および進化論派の連合心理学による歴史的な社会的な人間解釈とが存在している」と述べた。この指摘は「『文学論』に関しては正しい」が、これを「『文学論』以後の漱石」、あるいは「短簡なかたちでその文学観を」述べた「『文芸の哲学的基礎』および『創作家の態度』」にまで「押しつけるならば、それは誤りといわなければならない」。何故なら、漱石における「意識の『存在』についての考え方」ばかりではなく、「その『推移』の解釈」までもが『文学論』以後決定的に変わったからだ、と。

鳥田説の重要な根拠は、『文学論』「第五編第二章意識推移の原則」の要約である。『文学論』はここで、「此章に於て吾人の得たる法則を一括すれば左の如し」と述べ、これを六ヶ条の箇条書きにしている。

- (一) 吾人意識の推移は暗示法に因つて支配せらる。
- (二) 吾人意識の推移は普通の場合に於て数多のⒺの競争を経。(以下略)
- (三) この競争は自然なり。又必要なり。此競争的暗示なき時は

(四) 吾人は習慣的に又約束的に意識の内容と順序を繰り返すに過ぎず。

(以下略)

こう述べた上で、『文学論』は「この原則を、わが一生に応用し、他の一生に応用し、われと他とを併せたる浩蕩たる過去の歴史（中略）に応用して憚からざらんとす」と断言するのである。

島田は以上の事実を指摘した上で「文芸の哲学的基礎」に移り、以下のように主張する。この論文で、漱石は『文学論』「第五編」に述べた「考え方について承認を与えながら、あえて矛盾を冒して、全く新しい別の観点から」意識理論を提出したのだ、と。ここで島田が目するの、以下の部分である。

もう一遍繰返して「意識の連続」と申します。此句を割つて見ると意識と云ふ字と連続と云ふ字になります。かうして意識の内容如何と、此連続の順序の如何と二つに分れて問題は提起される訳であります。是を合すれば、如何なる内容の意識を如何なる順序に連続させるかの問題に帰着します。(中略) 意識及其連続を事実と認める裏には既に此問題が含まれて居ります。さうして此問題の裏面には選択と云ふ事が含まれて居ります。ある程度 of 自由がない以上は、又幾分か選択の余裕がないならば此問題の出やう筈がない。此問題が出るのは、此問題が一通り以上に解決され得るからである。此解決の標準を理想と云ふのであります。之を纏めて一口に云ふと吾人は生きたいと云ふ傾向を有つてゐる。(意識には連続的傾向があると云ふ方が明確かも知れぬが) 此傾向からして選択が出る。此選択から理想が出る。すると今迄は只生きればいゝと云ふ傾向が発展して、ある特別の意義を有する命が欲しくなる。即ち如何なる順序に意識を連続させやうか、又如何なる意識の内容を選ばうか、理想は此二つになつて漸々と発展する。後に御話をする文学者の理想もここから出て参るのであります。(圈点原文)

私見によれば、「意識の連続」とは、『文学論』が明言する通り主としてロイド・モーガンに示唆を得た概念である。この問題については後述することにして、もうしばらく島田の主張を聴こう。島田が「あえて矛盾を冒して」と言うのは、『ある程度の自由』と『幾分か選択の余裕』がないとするのが、(中略)『文学論』の考え方の立場(傍点原文)だった、と解釈するからである。だからこそ、『ある程度の自由』と『幾分か選択の余裕』のないと考える立場から、『ある程度の自由』や『幾分か選択の余裕』があると考える立場へと、いわばさりげなく移った漱石の移行」は、「彼の思想上の革命的变化」にはかならないのだ。より巨視的に見れば、この「移行」によって、漱石は「究極において決定論に陥ったスペンサーやバインはじめ、その垂流哲学者や、進化論的連合心理学派の立場」を離れて、「決定論の呪縛を一挙に振りはらっていた」と島田は述べる。

島田は、「一人の漱石の内部で行なわれた、この意識に関する二つの意見の対立と克服が、僅か30年前のヨーロッパに於いて、二人の偉大な思想家の間で行なわれていた」と続ける。「その一人はスペンサーであり、そして他の一人はウィリアム・ジェームズである」。島田はこれら二人の間で行なわれた論争を略述し、ジェームズにおける『主観的関心』の重視が、その有名な『意識の流れ』の節のなかで『意識の選択作用』をはじめて強調させることになった」と言う。その後、「漱石がスペンサー的決定論から脱けだして、自己の文学の基礎を確立したモメントが、ジェームズの提出した独創的な意見との接触にあったことは厳然たる事実である」と、島田は説く。「漱石はこの期を境にジェームズを媒介として『文学論』の古い立場を放棄した」と、島田は断定するのだ。

これは、胸がすくように明快な所説に見える。だが、ここにはいくつかの問題が潜んでいるのではないか。第一に、島田の断定が明快なのは、何かが「ある」のか「ない」のかという単純かつ二項対立的な論法を導入したからである。だが、こういう論法は「ある程度の自由」または「幾分か

選択の余地」(傍点塚本)があるといった微妙な表現を扱うのに適しているのだろうか。

第二に、『『ある程度の自由』と『幾分か選択の余地』がない(傍点島田)』とするのが『文学論』の考え方の立場だという島田の理解は、正鵠を射ているのだろうか。問題は、これが『文学論』の本文を十分に検討した上での結論ではないということである。これほど重要な断定を下すには、第二章の「一括」(つまり要約)だけではなく、少なくとも「第二章意識推移の原則」全般についての慎重な目配りが必要なのではないか。

第三に、漱石が「この期を境にジェームズを媒介として『文学論』の古い立場を放棄した」という島田の断定は妥当だろうか。この断定は、『文学論』では、ジェームズの心理学、少なくとも「意識の選択作用」を強調した「有名な『意識の流れ』の節」を漱石が十分に理解していなかったことを含意している。『『文学論』の古い立場』とは、「ジェームズを媒介と」する契機が訪れる以前の立場を意味するからである。これは、事実在即しているだろうか。

以上、島田説について三点の問題を提起したが、ここでは主として第二と第三との問題に関してやや詳しく考察してみたい。第一の問題は、その過程で自ずから明らかになるからである。ただ、以下においては順序を変えて、文献的事実に関する問題、すなわち初期の漱石とジェームズとの関係に関わる第三の問題から出発することにする。

3. 漱石とジェームズとの接点——ジェームズにおける

「暗示」と「自由意志」とを中心に

漱石とジェームズとの関係を網羅的に論じるとすれば、おそらく一冊の著書を必要とするだろう。だが、初期の漱石とジェームズとの接点を指摘するのは、比較的容易である。当面の問題との関連で言えば、『文学論』『第

一編第二章文学的内容の基本成分」には、早くも次の言葉が見える。

若し James が説く如く情緒は肉体的状態の変化に伴ふものにして、肉体的変化の因にあらずと仮定すれば、悲しきが故に泣くにあらず、泣くが故に悲しとの結論に達す。James 曰く「是等の下等情緒を論ずる自然の経路は、先ず或る事実を知覚し、其結果として情緒と名づくべき心理的感情を誘起し、此状態更に進んで肉体的表白を発するに至るべきなれども、余の説は全然この反対に出づるものにして、即ち興奮の事実の知覚に次ぐに直ちに肉体的変化を以てし、此変化はやがて情緒として現はるゝものなるべきを信ず」(*Principles of Psychology* 『心理学大綱』第二卷、449頁)。

これは、ジェイムズ＝ランゲ説として知られている有名な理論への言及である。漱石手沢本を参照すれば、ここに記されている449頁は「第二十五章情緒」に含まれていることが分かる。つまり漱石は、『文学論』執筆に際して、少なくともジェイムズの『心理学大綱』第二十五章には目を通してしている。だとすれば、漱石はこれ以外の部分、例えば、これに続く「第二十六章意志」を読まなかつたらうか。あるいは、第二十五章以前の部分、特に「第九章思考の流れ」には目を通さなかつたらうか。ここで第九章に拘るのは、島田の言う「有名な『意識の流れ』の節」(傍点塚本)なるものは『心理学大綱』(あるいは『心理学原理』)には見当たらず、それに最も近いのが「第九章思考の流れ」(傍点塚本)だからである。

漱石が「思考の流れ」とせず「意識の連続」とした理由については後述するとして、漱石が『文学論』以前に「第九章思考の流れ」に目を通していたことは、疑問を挟む余地もない。それは、漱石が帰国直後に大学で行なった講義、「英文学形式論」を検討すれば明らかである。この講義で漱石は、「形式のみが吾々に満足を与へて思想の全く欠けた文例を挙げ」

ている。「この種の文例は至つて稀である」が、漱石はその実例を「心理学者のジェームス (James) の見出した例より」取った(傍線原文)。この例文は、『心理学大綱』「第一卷第九章思考の流れ第三節個々人の意識の中では思考が連続していると感じられる」で、ジェームズが挙げたものである⁴⁾。

漱石は、これを「全く無意味の文」で「形式があつて思想はない」とし、「その形式あるために幾分智力に満足を与へるのみ」だとした。ジェームズは、何故このような馬鹿げた例文を挙げたのか。ジェームズはほぼ次のように述べる。われわれが一連の言葉を聞くと、耳慣れない外国語や奇妙な語法が突然現われると、ある種の衝撃を受ける。しかし、それとは反対に、用いられる単語が同一の言語に属し、文法的構造も正しい場合には、まったく無意味な文章であっても疑問を抱くことなく受け容れられてしまうことがあるのだ、と。それが、「形式があつて思想はない」文章である。漱石が挙げた例は、ジェームズが Jean Story 著 *Substantialism or Philosophy of Knowledge* (1870) という哲学書から引用したもので、ジェームズによれば、784頁にも及ぶこの大著は終始この種の無意味な文章から成立している。「思考の流れ」は、いわばこのような病的現象を生む場合もあるのだ。ジェームズはここで、徹頭徹尾このような文章で一貫している書物、「内容から見て、真正の狂人が書いたとしか思われなような書物が毎年出版されている」という言葉を付け加えている⁵⁾。

この前後は漱石の記憶に強く残されたらしく、『文学論』も同じ部分に言及している。すなわち、「第四編第三章自己と隔離せる聯想」に、「心理学者 Prof. James 曰く『同一の国語より成立し、文法上の誤りなき時は、全然無意味の文字の集合も咎められずに受け取らるゝこと屡なり』と」とあるのがそれである⁶⁾。

「英文学形式論」ばかりか『文学論』も『心理学大綱』「第九章第三節」からの引用を載せている以上、それに続く部分(「第九章第五節意識は常

に対象の特定部分に興味を示し、考えながらそれを歓迎したり、拒否したりする。すなわち、選択する⁷⁾」という部分)にも漱石が目を通したと想定するのは、きわめて自然である。「意識の選択作用」を強調するこの部分を漱石が読んだにも拘らず、『文学論』執筆当時はその重要性に気がつかなかったと考えるのであれば、それなりの理由がなければなるまい。かくして、島田説には重大な疑問符がつく。漱石とジェイムズとの接点を検証すれば、島田説はこう述べているに等しい—漱石は、ジェイムズが「意識の選択作用」を強調した部分を読んでいながら、『文学論』執筆当時はその意義を理解しなかった、と言うに等しいのである。

4. ジェイムズは「暗示」を全否定したか

既述の通り島田は、「吾人意識の推移は暗示法に因つて支配せらる」という『文学論』の言葉から、『『ある程度の自由』と『幾分か選択の余裕』がないとするのが『文学論』の立場(傍点原文)」だとした。島田の理解では、「暗示」の支配を認めることは、「ある程度の自由」や「幾分か選択の余裕」を全面的に否定することに等しいのである。だが、このような理解は妥当だろうか。島田が目した「暗示」という言葉は、19世紀後半の流行語ともいべきもので、論者によってはきわめて恣意的に使われている⁸⁾。ここで「暗示」に関わる諸問題を網羅的に論じることはできないが、この語に関するジェイムズの考え方、特に暗示と意志とについての考え方は一瞥しておくべきだろう。結論を言えば、ジェイムズは意識の選択作用を主張すると同時に、「暗示」の効果をも認めているのだ。

ジェイムズがこの問題に触れているのは、主として『心理学大綱』「第二十七章催眠」においてである。ジェイムズは一見不可思議な催眠現象を観察した結果、「3、4歳以下の小児、精神異常者、特に白痴」に催眠術

をかけるのは困難だが、それ以外の人々は、人種、性別を問わず催眠状態に導くことができるとした。これには、「生まれつきの『意志』の強弱はまったく関係がない」のである⁹⁾。次いでジェイムズは、催眠現象の本質を説明する仮説として当時有力だったもの、すなわち「動物磁気 (animal magnetism)」理論、「神経症 (neurosis)」理論、および「暗示 (suggestion)」理論の三者を検討し、先ず「動物磁気」理論を斥ける。次いで「神経症」理論と「暗示」理論とを詳しく検討した結果、「現時点においては、(中略)暗示理論が神経症理論に対し完全に勝利したと言えるだろう」と述べる。ジェイムズによれば、様々な文献で報告されている催眠現象は、「われわれ全てがある程度まで持っている例の精神的感受性 (mental susceptibility) の結果」なのだ¹⁰⁾。

「意志」との関係で特に興味深いのは、「後催眠暗示 (post hypnotic suggestion)」といわれるものである。これは要するに、「被催眠状態 (trance)」の中で与えられた暗示が、覚醒した後に効果を顕すという現象である。この現象が見られるとき、「被験者は暗示にかかり易くなっているわけでもなく、記憶を喪失したわけでもなく、不可解なままに自分の中に湧きあがってくる不合理な衝動に対し、意志の総力をあげて (with all the strength of his will) 闘っているのかもしれない」とジェイムズは言う。ジェイムズが、既に与えられた暗示と「意志の総力」との葛藤に注目していることは、重要である。このような場合、被験者は被催眠状態の中で暗示を与えられたことを忘れて、この衝動が自己の内部から生まれてきたように感じているのだ。この現象について、ジェイムズはこう述べる。「要するに被験者は、いつもの通り自分のごく自然であり自由であるという感覚で行動する。そこで、当然のことながら、自由意志を信じない人々は、自由意志とは幻想なのだということの証明として、このような症例を重視してきたのである¹¹⁾」と。

ジェイムズは、「自由意志を信じない人々」に対して、直接の反論を加

えてはいない。しかし、第二十七章を通読すれば、ジェームズの真意は自ずから明らかになる。既述の通り、催眠状態を導くのは「暗示」だというのが、ジェームズの基本的立場なのである。ところがジェームズは、既に第九章で「意識の選択作用」を強調している。すなわちジェームズは、「意志」が「暗示」に支配されると思われる場合があっても、だからといって自由意志が全面的に否定されるわけではないとしているのだ。換言すれば、ジェームズは単純な二項対立的論法を斥けているのである。このあたりにも、プラグマティストとしてのジェームズの片鱗を看取することができるであろう。

付言すれば、ジェームズは『宗教的経験の諸相』第二講の冒頭で、次のように述べている。すなわち、「理論化しようとする精神は、その材料を常に単純化し過ぎる傾向がある。これが、哲学と宗教との両者を悩ましてきた絶対主義や偏狭な独断論すべての根源なのである」と¹²⁾。ジェームズの立場からすれば、「理論化」のための過度の「単純化」が危険を孕んでいることは、心理学においても同じだったはずである。

5. 『文学論』は「ある程度の自由」を認めていないのか ——「第五編第二章意識推移の原則」再考

『文学論』は「ある程度の自由」ないし「幾分か選択の余地」が「ない」としたという島田の理解は、正しいだろうか。繰り返すが、漱石はこの時『心理学大綱』「第九章思考の流れ」に目を通してしている。にも拘わらず、ジェームズの主張する「意識の選択作用」は、『文学論』における「意識推移の原則」から完全に脱落してしまったのだろうか。換言すれば、「意識推移の原則」は、島田の言う通り「決定論の呪縛」から脱し得ていないのだろうか。この疑問を解くためには、第二章の結末において「一括」されている「法則」ばかりでなく、第二章全体を精読する必要がある。当面の

問題との関連で看過できないのは、「第二章（一）一時代に於る集合意識の播布は暗示の法則に因つて支配せらる」の一部、具体的には以下の部分である。

吾人がFを焦点に意識する時、之に応ずる腦の状態はCに在りと仮定し得べし。而してFのF'に推移するとき、Cも亦之に応じてC'に推移するは疑ふべからず。(中略) 果して然らばCはC'を生ずる一の条件にして、而してC'はF'に相応する腦の状態なるが故に、Cは亦F'を生ずる一の条件なり。而してCは何等の刺激(内、外)なくしてC'に移るの理由なきが故に、F'を生ずる必要条件はCとS(刺激)とに帰着すべし。(中略) 此Sの性質は未定なれども、之を一に限るの不合理的なるを以て、種々なりと推定す。強弱の度に於て、性質の差に於て一様ならざるSがCを冒すときは、何れの場合に於てもCは一様なる難易の度を以てSに反動するの理なし。あるSに応ずる事は速かに且つ強く、あるSに応ずる事は遅く且鈍きことあり。是に於てかCを以てそれ自身に於て断然たる特殊の傾向を有すると見做すは已を得ざるの結論なり。断然たる特殊の傾向を有するCにして二個以上のSに選択の自由を有するときは、第一に尤も其傾向に都合よきSを迎へて、之と抱合してC'を構成し、C'を構成したるの結果としてF'を意識するに至るべきは必然の理なり。(中略) 幾多のSが却下せられたるとき、尤もCの傾向に適したる幸福なるSはCを抱いてC'を生ず。此過程を意識したる語に翻訳すれば、FのF'に推移する場合には普通Sの競争を経ざるべからずと云ふ意義となる。而して此Sさへも意識的内容を有する方面より見るを得るが故に、上の命題はFのF'に推移する場合には普通幾多のFの競争を経ざるべからずと変ずるを得。(圈点原文、傍点塚本)

やや長い引用になったが、先ず「二個以上のSに選択の自由を有するときは（傍点塚本）」という部分に注目したい。この表現そのものが、「文芸の哲学的基礎」における「ある程度の自由」ないし「幾分か選択の余地」に近いからである。この前後を虚心に読めば、「種々な」る「S」すなわち複数の刺激の中から自己の「傾向」に最も「都合よき」ものを「迎へ」る主体は、「断然たる特殊の傾向を有するC」，すなわち、独自の志向性を持つ「脳の状態」である。これは、「脳」が「断然たる特殊の傾向」すなわち独自の志向性によって、複数の刺激の中から自己に最も「都合よき」ものを「選択」する、と言うに等しいのではないか。これが、「決定論の呪縛」を脱し得ない立場からの発言であろうか。

このようにして、「脳」および「刺激」という語を用いた叙述は、いわば生理学的な仮説である。そこで『文学論』は、これを「意識に關したる語に翻訳」する。換言すれば、同じ現象について、生理学的な仮説から心理学的な記述に移る。このようにして、心理学的説明と生理学的仮説とを交互に提出しつつ自己の主張を展開するのは、スペンサーやジェームズの著書を含めて、当時多くの心理学書に共通する形式であり、『文学論』もこれらの先例に倣ったにすぎない。かくして、先に提出した生理学的叙述は、「FのF'に推移する場合には普通幾多のⒺの競争を経ざるべからず」という心理学的叙述に変換される。この言葉は、第二章の終りで漱石が「一括」した「(意識)推移の法則」第二項、すなわち「吾人意識の推移は普通の場合に於て数多のⒺの競争を経」と基本的に同義である。とすれば、島田が「ない」とした「ある程度の自由」や「幾分か選択の余地」は、島田自身が引用した部分、特に「数多のⒺの競争」という言葉の中に含意されているのではないか。

「数多のⒺ（傍点塚本）」が「競争」するのは、「C」という「脳の状態」に複数の「S（刺激）」が加えられるからである。その時「C」は、複数の競合する「S」の中から最も「都合よき」ものを「迎へ、その他を「却

下」する。あるものを「迎」えて、他のもの「却下」するのは、「脳」が「断然たる特殊の傾向」を持つからである。これを心理学的叙述に変換すれば、「吾人意識」は「選択」作用をもつということに他ならない。とすると、この部分にジェイムズの影響を想定してもあながち不合理とは言えないのである。ただ、「刺激」が脳の外部から加えられる以上、「脳」は与えられた「刺激」の中から最も「都合よき」ものを「選択」するほかはない。これこそ、我々の「自由」が「ある程度」以上ではなく、「選択の余地」が「幾分か」に過ぎない理由である。

かくして『文学論』は「二個以上のSに選択の自由」を認めているのに、他方では何故「暗示法に因つて支配せらる」という表現を用いたのか。それは、右の引用に続く「㊦」の解説を見れば容易に理解される。「㊦」は焦点に存在するもの、意味を有せず、識末もしくは識域下にあるものがかね称す。かくの如くFのF'に移るには幾多の㊦より申し込を得て、其うちより尤も優勢なるものもしくはFの傾向に適したるものを採用するが故に、此意味に於て吾人の意識焦点の推移は暗示法に支配せらると云ひ得べきに似たり。如何となればF'は突然としてFを追ふて、焦点に上るものにあらず、吾人が明瞭に之を意識する前既に幽かに暗示せらるゝが故なり（傍点塚本）」と。

ここで、『文学論』が「暗示」という語を用いた理由が明らかになる。それは、『文学論』が「吾人が明瞭に之を意識する前」、すなわち、無意識のレベルまでも視野に入れているからなのである。ここで「識末」あるいは「識域下」にある「㊦」とは、現在の用語では、無意識あるいは潜在意識中であつてわれわれに働きかける複数の観念と言い換えても大差あるまい。これらの観念は、定義上、明確な意識からは排除されている。しかし、われわれが明確には意識しないこれらの「㊦」も、われわれの「意識推移」と無関係ではない。そこで『文学論』は、我々の意識に上らない「数多の㊦」が「競争」する可能性を強調するために、「暗示」という語を用

いたのだ。かくして、「暗示」と「幾分か選択の余地」とは矛盾しないというのが『文学論』の立場である。基本的に、これはジェイムズの立場と同一ではないか。

ここで、本稿「3. 漱石とジェイムズとの接点」冒頭近くで提出した問題、すなわち、「文芸の哲学的基礎」が「思考の流れ」とせずに「意識の連続」という表現を採った理由の一つが明らかになる。「思考」とは「意識の焦点」にある「F」を表わすには適切であっても、「識末」あるいは「識域下」にある「Ⓔ」を表わす語としては、問題が残るだろう。それ故に、漱石はジェイムズの用いた「思考の流れ」という表現を採らず、ロイド・モーガンの言う「意識の波」を借りて、「意識の連続」としたのだ。

この前後における『文学論』の説明には、用語の問題を含めて、不適切なし不十分なところがあるのかもしれない。『文学論』にも、「専門家ならざる余の、かゝる問題に入るは、好んで水際を離れて鞞下に唸鳴する鮎魚に似たりと雖も、全章の主意に関係あるを以て、門外漢の理論として、卑見を述ぶるの必要を認む」という言葉がある。だが、「門外漢の理論」も、決して理解不能というわけではない。『文学論』「第五編第二章」全体を精読すれば、ここで「ある程度の自由」が認められていることばかりか、「自由」が「ある程度」以上ではありえない理由も明白になる。すなわち『文学論』は、いかなる意味でも「スペンサー的決定論」の立場をとっているとは言えないのだ。

「文芸の哲学的基礎」で、漱石は「意識推移の原則に就ては私の『文学論』の第五篇に不完全ながら自分の考へ文は述べて置きましたから、御参考を願ひたいと思ひます」と述べたが、この言葉は「意識」理論に関する限り両者の間にはいささかの変化もないことを示唆している。『文学論』と「文芸の哲学的基礎」との間に「革命的变化」があるとする島田説には、何の根拠もない。

6. 『文学論』の「意識」理論はスペンサーの影響下にあるのか

そもそも、『文学論』における意識理論には、全体としてどの程度にスペンサーの影響が認められるのか。

スペンサーは一時代を代表する大思想家で、19世紀後半における思想的空気の一部だったとも言える。この空気を多少とも吐吞しなかった同時代の知識人は、おそらく皆無であろう。しかも、彼が扱った主題は驚くほど多岐にわたっており、彼の龐大な著作で採り上げられなかった問題はほとんどなかったとさえ言われている。一般的にはスペンサーに批判的立場をとる論者でさえ、部分的にはスペンサーの理論を承認している例も少なくない。島田がスペンサーの対極に置いたジェイムズすら、一面ではスペンサーを高く評価している¹³⁾。おそらく19世紀のある時期、スペンサーと全く隔絶した世界で執筆活動に終始した学者・思想家は、事実上存在しなかったのではなからうか。

問題を「スペンサー的」またはスペンサーの「亜流」にまで拡大すれば、その内容はますます曖昧化し、希薄化する。「外延 (extension)」と「内包 (intension)」とは、反比例するのだ。こう考えれば、問題を「スペンサー的」といったところにまで拡大するのは、生産的ではあるまい。ジョン・ロックは人間の心は本来「白紙状態 (tabula rasa)」だとしたが、人間の意識がある程度まで外的条件によって「決定」される可能性は、いかなる経験論者も排除することができないからでもある。ここでは、『文学論』にスペンサーの直接かつ明白な影響が認められるか、ということに問題を限定せざるを得ない。

島田理論が論拠とする『文学論』「第五編第二章第一項」、すなわち「意識推移の原則」の第一項は、「吾人意識の推移は暗示法に因つて支配せらる (傍点塚本)」と述べる。この命題から想起されるのは、その直前、す

なわち「第五編第一章」における「模倣的意識」の定義である。ここでは「模倣的意識とはわが焦点の容易に他に支配せらるゝを云ふ（傍点塚本）」とされるが、このあたりの表現にはスペンサーの影響があるのだろうか。

否、この部分の直接の源泉はガブリエル・タルド（1843-1904）である。タルドはフランスの社会学者だが、漱石はカルル・グロース（1861-1946）の『人間の遊戯（*The Play of Man*）』を通して、タルドの学説をかなり詳しく知ったのだ¹⁴。『文学論』「第五編第一章」は、「わが焦点の容易に他に支配せらるゝ」とは「要するに嗜好に於て、主義に於て、経験に於て他を模倣して起るもの（傍点塚本）」だと説く。この部分が依拠しているのは、『人間の遊戯』の一部、すなわち、「無意識あるいは不本意ながら他人の態度を再現したり、外的暗示を受け容れたりする人について、タルドは、その人は模倣しているのだ（中略）と述べる（傍点塚本）」というあたりである¹⁵。「第五編第一章」は、「模倣は社会を構成するに膠油の如く必要なるものなり」とした後、「此故に学者云ふ社会は模倣なり」と付け加えるが、この「学者」とは『人間の遊戯』で紹介されているタルドに他ならない。『人間の遊戯』には、“Though Tarde’s formula, ‘*La société, c’est l’imitation,*’ had the one-sidedness characteristic of an epigram, it is an unquestionable fact that this impulse is of fundamental significance in the origination and preservation of social conditions（下線は漱石）¹⁶.” という記述があって、「社会、それは模倣である」というタルドからの引用部分には下線が引かれている。この出典を示さなかったのは、漱石が「創作に忙はしくて、これ[＝原稿整理]に用ゆべき日子の極めて得難かりしこと」に因るのであろう。漱石は、記憶を確かめるために原書にあたるという労を惜しんだのである。

「野分」（1）にある言葉、「仏蘭西のタルドと云ふ学者は社会は模倣なりとさへ云ふた位だ」という言葉も、この部分に拠っている。近代化に邁進していた当時の日本には、この言葉を想起させるような事例が多く見ら

れたに違いない。

「模擬的意識」から最も遠いのが、「天才的意識」である。「天才的意識」とは、「声誉を俗流に擅にする能はざるのみならず、時としては一代の好尚と相反馳して、互に容るゝ事能はざるの不幸に会す」るものである。この「天才的意識」が「庸衆と廻かにその撰を異にせる」所以を説明すべく、『文学論』は二つの仮説を提出する。その一は、天才は「千里の遠きを視、千里の外を聴くが為めに凡人と異なる」というものである。その二は、「天才の意識焦点中には他人に見出し能はざる一個の核となづくべきもの」があって、この「只一個の核の存在の為に、いづれの焦点に於ても常人と異なるの奇観を呈する」というものである。特に後者の仮説を採れば、天才は「いづれの場合、いづれの時にも会釈遠慮なくして此自己に特有なる核を以て見、核を以て聞くが為めに凡人と異なるに至」るのである。「此核」は「数学に所謂恒数」であり、それが「常見と反し、常識と戻る場合」にも彼ら自身はそのことに気がつかない。「是に於てか彼等は時に流俗の怒を招き又其嘲笑を買ふ」のである。このような「天才的意識」が他を「模倣」することもなく、外的「暗示」を容易に受け付けられないのは、明白であろう。鳥田理論は、最も漱石的とも言うべき「天才的意識」を無視している。

『文学論』は、「実例に就て天才の風貌を窺はんと欲するものは Lombroso の *The Man of Genius* を繙くべし」と述べる。漱石文庫に残されているこの研究書について詳述する余裕がないが¹⁷⁾、ここでは当面の問題との関連で、ロンブローゾ (1836-1909) から一ヶ所だけ引用しておく。ロンブローゾは言う。「ユルゲン-マイヤーによれば、『能才 (talent) は自分自身を知っている。自分がどのようにして、また、何故、特定の理論に到達したかを知っている。ところが天才 (genius) は違う。どのようにしてとか、何故とかいうことは、天才は知らないのである。天才の概念作用ほど自然発生的なものはない』と¹⁸⁾。この部分が重要なのは、言うまでもなく、「天

才」と「能才」とが鋭く対置されているからである。すなわち、第五編第一章において、「模擬的意識」と「天才的意識」との間に「能才的意識」という概念が提出される契機の一つが、この一節だと考えられるからである。

ただ、「天才」が「能才」とは異質であるとする考えは、ロンブローゾに始まるわけではなく、心理学や精神医学の領域に限られるわけでもない。それは文学や哲学の領域でも広く見られ、17世紀のイギリスには既にその萌芽が認められるとされている。「天才」と「能才」とは、いわゆるシュトゥルム・ウント・ドラング時代を経て鋭い対立関係にあると理解されるに至り、この構図は少なくとも19世紀末までは連綿として続いていく¹⁹⁾。この伝統が広大であるために、かえって漱石との接点を特定することは困難だが、ロンブローゾもその一つだったことだけは疑い得ない。ここでは、漱石の視野には、早くからこのような広大な文化的伝統が入っていたことを指摘するにとどめておこう²⁰⁾。

付言すれば、漱石は学生時代すでにこの伝統を知っていた。明治24年、漱石がジェイムズ・メイン・ディクソンの依頼によって『方丈記』を英訳したことは周知だが、その冒頭に付けられたエッセイは、次のように始まっている。

The literary products of a *genius* contain everything. They are a mirror in which everyone finds his image, reflected with startling exactitude; they are a fountain which quenches the thirst of fiery passion, refreshes a dull, dejected spirit, cools the hot care-worn temples and infuses into all a subtle sense of pleasure all but spiritual; an elixir inspiring all, a tonic elevating all minds. The works of a *talented man*, on the other hand, contain nothing. There we find fine words, finely linked together and fine sentiments, also finely interposed. But then they are only set up

for show. Like a mirage, they strike us for a moment with astonishment, but soon slip out of our mental vision because of their unsubstantiality. We may be amused by them just for an hour or so, then dispense with them forever without incurring any loss to our intellectual storehouse (引用文中イタリックは塚本).

このエッセイは、「天才 (genius)」の作品と「能才 (talented man)」のそれとが単に表現上の技巧においてばかりでなく、作品の質そのものにおいても鋭い対極的關係にあるとしている。「天才が生んだ文学作品は一切のものを含んでいる」のに対し、「能才の作品は何ものをも蔵していない」からである。このような思考は、「スペンサー的決定論」から程遠いのではないか。

以上は、『文学論』「第五編」、特にその「第一章」に関わるいくつかの側面の検討に過ぎない。だが、右に挙げた事実を見ただけでも、『文学論』に占めるスペンサーの比重は、著しく低いと評価せざるを得ないであろう。

では、スペンサーその人は、『文学論』ではどのように扱われているのか。直接スペンサーの名が挙げられるのは全巻中6ヶ所、そのうち『心理学』との関連では僅かに3ヶ所に過ぎない。具体的には、先ず、「第一編第三章文学的内容の基本成分」中「両性的本能」を論じた部分である。次に、第一編第三章に「恋愛にも、かの Spencer が指摘せる如き幾多複雑の分子あつて始めて興味津々たり得べし」とあり、さらに同じ第三章に「仮令ば Spencer が説きし恋の如く種々の成分が一の齟齬するところなく相集りて一情緒を構成することあり」という言葉が見られる。だが、これらのどの例でも、スペンサーの「意識」理論に関わる言及は見られない。

なお、「第三編第二章文芸上の真と科学上の真」では、スペンサーの進化論に関して興味深い言葉が見られる。『文学論』の基本的立場は、「凡そ文学者の重んずべきは文芸上の真にして科学上の真にあらず」というもの

である。だが同時に「文芸上の真」が永遠不変ではないことをも認め、その実例として「数年前の雑誌 *Academy and Literature*」²¹⁾ に載った投書、「一般社会」が「高級文学に対」して「冷淡」になった原因をスペンサーに求めた投書を紹介する。すなわち、「碩学スペンサーが其大著に於て科学を目するに至高至大の力なりとし、これを吾人精神界の女王に擬し、世の芸術文学はすべて其賞讃を目的としとしてこれに隷属する侍女なりと説きしより、余が意見は勿論、世間大方の意向はこれによりて著しく根本的变化を受けたるに似たり」というのである。投書者は、続けて非科学的内容をもった多くの有名作品を挙げ、自然科学の視点からこれらを非難するが、『文学論』はこの投書について以下のように評している。

吾人の眼を以てすれば此文中非難として挙げたるもの、多くは殆ど非難たるの価なきものなれど、此寄書家にとりては真面目にかく感じたるものなること疑ひなし。即ち吾人が文芸上の真なりとして許容するところのものを彼は真ならずとして斥けしなり。後年世の趣味が一変して公衆の大部分が挙げて皆此種の意向を有するに至らば、今の世の文芸上の真は全く其趣を改め沙翁は永く世に忘らるゝに至るべきか。

この一節は、スペンサーの進化論を機械的に「芸術文学」に適用するのを非としている。一般論としても『文学論』は次のように説く。「当期に於る F と次期に於る F' を比較して其優劣を判ずるとき後者の必ずしも前者に優らざるは自然の理」であり、「ことに趣味を生命とする文学に於ては其甚だしきを見るべし」と。また、「開化は着々として進行」し、「生活の程度は向上」しても、「天下に第二の Sophocles なく、第二の Shakespeare なく、第二の Raphael なるべし」というコンウエイ (1856-1937) の立場に同調するのだ。これは無論、「芸術の士にして彼等と名声を等じうるに足る者」が出ないということではない。ただ、そのような大芸術家が

出現しても、「彼等の領域に於て彼等を凌ぐ事能はず、又彼等と覇を争ふ事を得」ないのである。要するに、文芸の世界では、科学の世界とは違って、直線の進歩（ないし進化）といったものはあり得ない、とするのである。

以上を要するに、『文学論』はスペンサーの意識理論に全く言及していないばかりか、スペンサーの進化論を機械的に「文学芸術」の歴史に適用するのを不可とする。そうだとすれば、『文学論』におけるスペンサーの直接的影響は、全体として無視し得るほどに小さいと言わなければなるまい。しかも『文学論』自体が、ロイド・モーガンの説によって「意識」を「説明」として宣言しているのである。これが事実を反するという確証をあげることができない限り、『文学論』におけるスペンサーの影響を過大に評価するべきではあるまい。（未完）

注

- 1) 島田厚「漱石の思想」より。初出は「文学」（昭和35年11月号）、後に『日本文学研究叢書・夏目漱石』（有精堂、昭和45年）に収録。本稿では、『日本文学研究叢書・夏目漱石』、113-115頁から引用した。「漱石の思想」は半世紀以上も前に発表されたものだが、未だに影響力を失っていない。例えば、江藤淳編『夏目漱石』（朝日新聞社、1977）は、「文芸の哲学的基礎」の「参考文献」に、先ず島田厚「漱石の思想」を挙げている（175頁）。また、平岡・山形・影山編『夏目漱石事典』（勉誠出版、平成12年）は、「漱石は『文学論』においては（中略）スペンサーやバインの進化論的連合心理学の説く決定論と、その原則に自由な選択を認めるジェームズの立場との間で微妙に揺れ動いていたが、（中略）『文芸の哲学的基礎』では、明確に意識の連続において選択を認める立場に立ち、ジェームズ『心理学原理』に近づいている」とする（143頁）。これは、『文学論』では「スペンサーやバインの進化論的連合心理学の説く決定論」に影響を受けたとする点で、また、『文学論』の立場と『文芸の哲学的基礎』のそれとの間に明らかな変化を認めるという点で、島田説と軌を一にしている。
- 2) 重松泰雄『『文学論』から「文芸の哲学的基礎」「作家の態度」へ』（内田・久保田編『作品論・夏目漱石』双文社出版、昭和51年、363頁参照）
- 3) 加茂章『夏目漱石—創造の夜明け』（教育出版センター、昭和60年）、1頁。初出は、「決定論を超える漱石—スペンサー・ジェームズ受容の背景について」（『日本文

学』昭和59年3月号所収)

- 4) 重松泰雄は既に、『『英文学形式論』(中略)中に長々と引かれている『ジェームズの見出した』文例は、『(心理学)原理』第一卷第九章『思惟の流れ』にある』ことを指摘している(『漱石とウィリアム・ジェイムズ』,『国文学』,学燈社,昭和46年9月号。塚本編『比較文学研究』,朝日出版社,昭和53年,に再録。)重松は,この「文例」が挙げられている正確な頁数には言及していないが,この「文例」は,漱石手沢本 *The Principles of Psychology* では第一卷263頁に挙げられている。なお,ジェイムズ自身が原著を要約した *Psychology, Briefer Course* (または *Textbook of Psychology*) (1891) では,第十一章が「意識の流れ」と題され,ここでは「語が同一語彙に属し文法的構造が正しい時には,全く意味をなさぬ文でも,之を語る時は信じられ別段の攻撃をうけずに済むことがある」となっている。その例が,「同じ様な善言の集合を色々に並べかへたやうな祈祷会の感話や,三文文士や新聞通信員の飾りたてた文章の類」である(『心理学』上巻,岩波文庫,昭和49年,209頁)。島田が参照したのは *The Principles of Psychology* (漱石の言葉では『心理学大綱』)ではなく,これを要約した『心理学』ではないのか。
- 5) James, *The Principles of Psychology*, Vol. I (Dover., 1950), p. 264.
- 6) 原文は,“(Conversely,) if words do belong to the same vocabulary, and if the grammatical structure is correct, sentences with absolutely no meaning may be uttered in good faith and pass unchallenged.” この直前の例,すなわち,ある人が「時の碩学某に戯れて, Bunzen の近著 *Malleability of Light* を知れりやと問ひしに其人恥かしげに未だと答へ」たが,そもそも “malleability of light” などという概念が成立し得るはずはない,という部分は, Lewes (G.H.), *The Principles of Success in Literature* (London: W. Scott, n.d.), pp. 32-33. によっている。また,『猫』(九)では天道公平なる人物から苦沙彌に一通の書状が届く。苦沙彌は,「若し我を以て天地を律すれば一口にして西江の水を吸ひつくすべく」と始まる不可解な内容を一読,「中々意味深長だ。何でも余程哲理を研究した人に違ない」と大いに感心するが,後にこの人物が「瘋癲院中に盛名を擅まゝに」している「純然たる狂人」であることを知って,「氣狂の説に感服する以上は(中略)自分も亦氣狂に縁の近い者であるだらう」と心配になる。この場面は,ジェイムズに示唆を得たと思われる。
- 7) *Ibid.*, p. 284.
- 8) ジェイムズもまた,「暗示」という語が不正確な意味で濫用されていることを批判している (cf., *ibid.*, Vol. II, p. 601)。なお,当時「暗示」なる語がどのように用いられていたかについては,佐々木英昭『漱石先生の暗示』(名古屋大学出版会,2009)第三章「暗示とは何か」が参考になる。
- 9) *Ibid.* pp. 593-595.
- 10) *Ibid.* pp. 596-599.
- 11) *Ibid.* pp. 613-614.

- 12) James, William. *The Varieties of Religious Experiences* (Collier Books, 1961), p. 39.
- 13) ジェイムズは、相対的に明確な一つの意識から次の相対的に明確な意識に移る中間に、「過渡的状态 (transitive states)」または「関係の感覚 (feelings of relation)」とも言うべき意識があると主張する。多くの学者はこれを否定するが、ジェイムズによれば、これを認める「少数の優れた例外」の一人がスペンサーなのである。ジェイムズは、「スペンサー氏の言葉はきわめて明快なので、その全体をここに引用する価値がある」とし、Spencer, *Principles of Psychology*, §65 の全文を引用している (James, *The Principles of Psychology*, Vol. I, p.247 and pp. 249-250.)。
- 14) 漱石文庫所蔵の Groos. *The Play of Man* (1901), “Part II The Playful Exercise of Impulses of the Second or Socionomic Order, III Imitative Play” には、タルドの理論が詳しく紹介されている。
- 15) Groos, op. cit., p. 281. 原文は省略。
- 16) Ibid., p. 334.
- 17) ロンブローゾについては、小倉脩三『漱石の教養』(翰林書房, 2010), 「II-5, チェザーレ・ロンブローゾ『天才論』」参照。
- 18) Lombroso, Cesare. *The Man of Genius* (1891), p. 19
- 19) See *Dictionary of the History of Ideas*, Vol. II (Charles Scribner's Sons. New York. 1973), pp. 293-312. この対立関係を強調したものの一つに, “Talent is that which is in a man's power; genius is that in whose power a man is. (能才とは人間が支配するものである。他方、天才とは人間を支配するものである)” というジェイムズ・ラッセル・ロウエルの有名なエピグラムがある。
- 20) 漱石文庫に残されている研究書を精査すれば、この伝統を承継した評論等を少なからず見いだせるのではなからうか。例えば、Lewes (G.H.), *The Principles of Success in Literature* (London, W. Scott, n.d.) は、一般論として作家を“men of genius”, “men of talent” および “imitators in art” の三種類に分類している (pp. 44-45)。
- 21) 金子三郎 (編) 『記録・東京帝大一学生の聴講ノート』(辞游社, 平成14年) は、これを「3月5日 Academy and Literature 二或者ガ投書セシナリ」としている (385頁)。